

認定特定非営利活動法人 レスキューストックヤード

東日本大震災 被災者支援 2018年度 活動報告書



七ヶ浜の七ヶ浜町民による新たな賑わいの場として



レスキューストックヤード代表理事 栗田 暢之

今年度も「きずなハウス」に月 1000 人以上の皆様にお越しいただき、心より感謝申し上げます。昨年度のオープン当初は、まるで砂漠のような前庭でしたが、植栽植樹や日々の水やりにご協力いただいた多くの方々のおかげさまで、色々な緑や木々が芽吹きはじめました。また、寺澤町長から「スケルトンハウス」と命名された建屋も、色鮮やかなのぼりや装具、多彩な飾り物などで様々に化粧して参りました。そして、スタッフは、名古屋からの派遣を一人とし、より地元主体の体制をめざしております。まさしく、七ヶ浜町の七ヶ浜町民による新たな賑わいの場として定着しつつあります。

キラキラした目で駄菓子を選ぶ小さな子どもたち、それを見守る優しい顔のお父さんお母さん、友達とおしゃべりしたり、宿題したり、外で思いっきり遊んだりする小学生、ボランティアに勤しむ中学

生、ポーちゃん焼きをゆっくりほおぼるお年寄り、みんな笑顔です。この何気ない日常の笑顔こそが、震災を乗り越え、明るい未来に向かう礎なのだと感じます。

令和元年 5 月には、生涯学習センター周辺の公園整備が完了され、着実に復興が進められていることに敬意を表します。当方としましても、既存の「きずな公園」とコラボした企画で盛り上げたいと思っています。一方で、それでも人の復興には当然温度差があります。「きずな号」をもっと走らせて、孤立させない取り組みにも心を馳せたいと考えています。

おかげさまで、きずなハウスは本当にみんなに愛され、育てられております。今後とも、ご指導・ご協力賜りますようお願いいたします。

記憶のカケラを集めて、次の世代に



レスキューストックヤード常務理事 浦野 愛

「みんなの家きずなハウス」がオープンして 2 年が経ちました。昨年度に引き続き、町の皆さんが気軽に立ち寄れる憩いの場として賑わっていることを、とても嬉しく思います。

先日、きずなハウスを拠点に活動している地域のボランティア団体ネットワーク『きずなネット』のミーティングにお邪魔しました。その時に、向洋中学校 F プロジェクトの生徒さんがとても印象的な言葉を聞かせてくれました。「私たちは震災の時、あまりに小さく、断片的な記憶しかありません。でも、町民の皆さんから当時の話を聞かせてもらうことで、足りない記憶のカケラを集めたい。そうすれば、私たちも語り部として、町で起こった出来事をきちんと伝えて行くことができるから」。こ

の言葉を聞いて、他のメンバーからは、堰を切ったように当時の話が溢れだしました。辛く、悲しいことも一杯あったけれど、語ることを通じて、精いっぱい頑張った当時の自分や、支えてくれた人たちと、記憶の中で再会されているかのようなでした。きずなハウスは、次の災害で、悲しみを抱える人が少しでも減っていくように、自分にできることを一人ひとりが考え、実行していく「まちの防災拠点」にもなりつつあることを実感しました。

2019 年度は雨水タンクや、かまどベンチなど、災害時にも役立つ設備も充実させる予定です。これからも末永く、命と暮らしを支える場所に育っていきますように。

七ヶ浜町の概要と震災による被害

七ヶ浜町は仙台市から15kmほど北東に位置する半島状の町。人口は約1.9万人、面積は約13.2k㎡。

名前の通り、「七つの浜」に囲まれ、漁業や観光が盛んです。

「^{しょうぶた}菖蒲田浜」は東北で最も古い海水浴場といわれ、家族連れをはじめサーフィンのメッカとして若者にも親しまれています。

昔ながらの漁師町のほか、仙台のベッドタウンとして新興住宅地も開発され、新旧の住民が入り混じった土地柄に。スポーツ施設やホールが充実しており、外国人避暑地だった歴史から造られた「七ヶ浜国際村」では、地元の子ども達を中心としたミュージカル劇団がつけられています。



**2011年3月11日、東日本大震災で震度5強の地震後、最大12.1mの大津波が襲来
菖蒲田浜地区を中心に沿岸の集落に被害**

津波浸水面積 4.8k㎡ (町域面積の36.4%)

死者108名、行方不明者2名

住家被害は全壊674棟、大規模半壊237棟、半壊413棟、一部損壊2,605棟

町内36か所の避難所にピーク時で6,143名の町民が避難

七ヶ浜町の復興状況

七ヶ浜町は2017年度、7月に菖蒲田海水浴場が本格オープンし、うみの駅と隣接して、新たに建設されたホテルやカフェを含むマリリゾートができるなど、復興・町の賑わいづくりに向かって大きく前進しました。町内全ての応急仮設住宅は2016年度末に閉所され、高台住宅団地や災害公営住宅への移転が完了しましたが、生活環境の変化、新しい人間関係の構築などの課題も出てきています。以下は高台住宅団地や災害公営住宅の整備戸数と入居状況です。

【高台住宅団地（防災集団移転促進事業）】 5か所 194戸整備完了

整備・再建状況[5/1 現在]

1. 松ヶ浜西原地区 : 整備戸数 13
2. 菖蒲田浜中田地区 : 整備戸数 30
3. 笹山地区 : 整備戸数 128
4. 吉田浜台地区 : 整備戸数 9
5. 代ヶ崎浜立花地区 : 整備戸数 14 整備戸数計 194 (着工192・再建191)

※再建戸数は、住宅完成後、高台住宅団地に住所を移した戸数

【災害公営住宅（災害公営住宅整備事業）】 5か所 212戸整備完了

整備・入居状況[3/1 現在]

1. 松ヶ浜地区 : 整備戸数 32 (入居 30)
2. 菖蒲田浜地区 : 整備戸数 100 (入居 94)
3. 花淵浜地区 : 整備戸数 50 (入居 48)
4. 吉田浜地区 : 整備戸数 6 (入居 5)
5. 代ヶ崎浜地区 : 整備戸数 24 (入居 24)

整備戸数計 212 (入居戸数 201)

きずなハウス 2018 年度の活動

- 2018 年
- 4/28 ファームガーデン植樹ワークショップ①を実施
 - 5/4 大空へ飛べ（富山県の NPO 法人）によるミニコンサートを開催
 - 5/18 七ヶ浜中学校校外学習受け入れ
 - 5/20 みふねっと（御船町災害支援団体ネットワーク）受け入れ
 - 6/3 ファームガーデン植樹ワークショップ②を実施
 - 7/21 きずなネットまつり&きずなハウス 1 周年開催
 - 7/29 きずな公園美化活動を実施
 - 7/31 名取市閑上出身のシンガーソングライターによる、歌づくりワークショップを開催
 - 8/13 きずな F プロジェクト（きずなネット）による、七ヶ浜の被災状況と復興状況を学ぶフィールドワークに協力
 - 8/25 おりおり（きずなネット）による、藍の生葉染めワークショップを開催
 - 9/8 横浜からのボランティアによる紙芝居の上演
 - 10/21 「きずな食堂@松ヶ浜」を開催
 - 10/21 「あさひ園祭り」にて東北学院大学ボランティアとともに、くじ引きブースを担当
 - 11/3 きずなネット研修会①『ファームガーデンの果実や野菜で保存食の作り方を学ぼう』を実施
 - 11/17 「菖蒲田浜地区ぼっけ汁祭り」に協力（ぼっけのボーちゃん焼き出店など）
 - 11/18 被災地学習・交流日帰りバスツアー実施
 - 12/4 亦楽小学校 2 年生校外学習受け入れ
 - 12/8 きずなネット研修会②『伝わるチラシの作り方』を実施
 - 12/9 安城きずなプロジェクトチームによる「安城・七ヶ浜ふれあい交流サロン」受け入れ
 - 12/16 花淵浜クリスマス交流会に協力
- 2019 年
- 1/27 代ヶ崎浜もちつき大会に協力
 - 2/16 七ヶ浜産のりを使ったチャレンジキッチン①の開催
 - 2/17 笹山ちゃせごの開催
 - 2/23 菖蒲田浜ちゃせごの開催
 - 3/2 きずなハウスフェスティバル開催、七ヶ浜産のり、わかめを使ったチャレンジキッチン②の開催
 - 3/5 七ヶ浜中学校震災学習受け入れ
 - 3/11 東日本大震災七ヶ浜町追悼式に参列
 - 3/16 七ヶ浜産わかめ、めかぶを使ったチャレンジキッチン③の開催
 - 4/24 宮城県漁業協同組合七ヶ浜支所へ「のり募金」の橋渡し

きずなハウス 定期開催の活動

きずなネット会議の定期開催（2か月に1回程度）
社協各地区お茶会、きずな喫茶 in 松ヶ浜への参加
きずなFプロミーティング（2か月に1回程度）への協力

名古屋事務局 2018 年度の活動

2018年 5/6 FOR 子ども支援～広域避難の子ども達の夢の実現を！・贈呈式
7/29 ふくしまくらしの相談会（岐阜）
11/17 郡山市交流相談会
2019年 1/30 JCN「3.11の今がわかる会議」
3/3 ふくしまくらしの相談会（三重）
3/11 東日本大震災犠牲者追悼式あいち・なごや運営（実行委員長として）

【ご寄付】株式会社ファミリーマート様

今年度も、株式会社ファミリーマート様より、「七ヶ浜みんなの家きずなハウス」に寄付のご協力を頂きました。私たちに託して頂いた大切なお金は、訪れた町民の皆さんに、居心地よく過ごして頂けるよう、ハウス内の環境整備を中心とした事務局の運営費に充てさせて頂きました。スタッフ一同、心から感謝申し上げます。ありがとうございました。



『きずなフィッシュ』

私たちの活動に賛同し、ご寄付を頂いた、個人・団体の皆さんのお名前とメッセージがウロコ部分に刺繍されています。制作は、「きずな工房」の皆さんにご協力頂いています。
ウロコの数、もっともっと増えるといいな♪

みんなの家きずなハウス（概要）

2017年7月21日、仮設店舗商店街「七の市」跡地に、『七ヶ浜みんなの家きずなハウス』をリニューアルオープンしました。建設にあたっては、レスキューストックヤード（以下、RSY）の活動にご賛同いただいた株式会社ロレックス、株式会社サークルKサンクス（現株式会社ファミリーマート）、NPO法人HOME-FOR-ALLをはじめ、多くの皆様から、多大なるご寄付、ご協力をいただきました。完成後、『きずなハウス』は町に寄贈され、町との協定のもとRSYが運営を担っています。



ハウス内には、豊富な種類の駄菓子や飲料等を販売する一画が設けられ、昔懐かしい「スマートボール」とともに、日々、子ども達が遊びにくるのを楽しみにしてくれています。他にも、宿題をしにくる子、友達との待ち合わせ場所に使う子など、いろいろな利用のされ方をしています。

また、ガラス張りの店内には、木製のテーブルやベンチがあり、午前中や昼過ぎ頃は、ご年配の方々や小さなお子様を連れたママさん達が訪れ、ファームガーデン（P.7参照）の豊かな緑を眺めながら、ゆったりした時間を過ごされています。

このように七ヶ浜の住民の皆様へ、憩いの場として利用していただくとともに、きずなネット（P.9参照）の活動拠点として、ワークショップの開催や町内外のボランティアの方たちの受け入れの場としても利用されています。

加えて、SNSでの情報発信や、ブランド七ヶ浜（※1）に認定された、きずなハウスの名物『ぼっけのポーちゃん焼き（※2）』の人気もあいまって、

町外から訪れる方も多く、きずなハウスは、世代や地域を超えた方々が、出会い、つながる場として、月1,000人を超える皆様が訪れています。

『娘と爺じで、駄菓子屋デートできるところがいい！』、きずなハウスをご利用いただいている、子育て世代のママさんからいただいた言葉ですが、とても嬉しい言葉でした。

今後も、RSYの復興支援の拠点でもあり、『みんな』の温かな交流が生まれる場所を目指していきたいと思えます。

※1 七ヶ浜の地域資源を活かした地場産品等を、町が「ブランド七ヶ浜」として認定し、情報発信することにより、七ヶ浜町の知名度向上と地場産業の振興を図るもの。

※2 七ヶ浜の特産魚「ぼっけ」を観光キャラクター化した『ポーちゃん』を模した、たい焼き風焼き菓子



いつも賑わう駄菓子・ゲームコーナー



大人気！きずなハウスの顔はめパネル

ファームガーデン

昨年度、環境省主催の「みどり香るまちづくり」企画コンテストで環境大臣賞をいただき、その副賞の苗木を植栽し、殺風景だった庭がみどりで彩られました。春には、ジューンベリーのような小さな白い花が溢れるように咲き、追うように桃色と白のハナミズキ、きずなハウスの入り口には真っ直ぐに伸びたルピナスなど、次々と多彩な花が咲き誇り、若木は葉を広げ、見る人を楽しませてくれています。そんななか、6月に植樹した高木のサルスベリが、7月の台風で倒れるというアクシデントに見舞われました。関係各所で話し合い、専門家の修復で甦り、見事に濃い桃色の花を咲かせた時には、その生命力に感動しました。このファームガーデンの整備と管理は、株式会社グリーン・ワイズの先生からご指導いただき、町民有志による「グリーンサポーターズ」を中心に行っています。今年度の活動は、午前には植栽の作業を行い、午後にワークショップという組み合わせにしました。

1回目は、畑で育てているのと同じハーブを使って、数種類のハーブをブレンドしてオリジナルハーブティーを作るワークショップを行いました。作業の後だけに、ハーブティーの香りは心地よく癒されました。



ハーブティーの試飲

2回目は、ファームガーデンにどんな樹木があるのか分かるように、樹名板を作りました。木片に樹木の名前を学名で表記し、麻ひもで枝に吊るしました。こうしておくことで、自然と名前を覚えることができます。3回目は、災害時に、地域住民の避難拠点としての機能を持つファームガーデンで採れる、ブルーベリーのジャムや干し柿などの保存食作りに挑戦しました。また、冬にかけては、土づくりのためのコンポスト作りをし、田んぼからもみ殻を集めたり、

落ち葉を集めたりしました。腐葉土になるには時間がかかりますが、良い土を作るために一生懸命に取り組みました。さらに、株式会社グリーン・ワイズの先生から管理にあたって、ファームガーデンの「年間管理計画」と「収穫スケジュール」をまとめていただき、参加者みんな学びました。



樹名板づくり



懐かしの干し柿づくり



コンポストづくり

被災者支援総合交付金を活用した「心の復興」事業 ～災害公営住宅及び高台住宅団地（防災集団移転団地）移転者支援～

七ヶ浜町では、2016年度末に町内全ての応急仮設住宅が閉所され、現在では町内5地区に整備された災害公営住宅212戸と高台住宅団地194戸への移転が完了しています。

移転先は、町の施策により、なるべく震災前に住んでいた地区に戻れるよう配慮されています。移転先での新しい生活にも慣れてきた一方で、震災から8年経ち、災害公営住宅では、一番高いところで100%、全体では43.3%となる高齢化率、それに伴う、引きこもりや生活不活発病などが心配されます。

R S Yでは、七ヶ浜町を通じ、復興庁の被災者支援総合交付金を活用した「心の復興」事業の補助金を受け、災害公営住宅と周辺地域、高台住宅団地での多世代交流やコミュニティづくりの促進を目的に、今年度は「地域への愛着と温かな人間関係を育む場作り」を応援する事業に取り組みました。

主に、災害公営住宅での引きこもり防止や人とのつながり、役割づくりへとつながるよう、料理作りや交流企画を取り入れた食事交流会「きずな食堂」（全4回開催、約400名参加）と、地区や地域全体の復興への機運を高める交流企画（全7回開催、延べ約860名参加）を実施しました。実施にあたっては、地区の有志により実行委員会を立ち上げるなど、企画立案や当日の運営を、住民が主体となって進められるよう努めました。

なかでも、子ども達が災害公営住宅や高台移転団地を一軒一軒訪れ、食事交流会の招待状を手渡しした「ちゃせご」（※3）は、日頃から家にこもりがちな高齢者の生活状況をお伺いするきっかけになったとともに、地区と子ども達との間に「顔見知り」の関係もでき、地域での見守り体制のきっかけづくりになればと、昨年度に続き、地区を拡大して実施しました。

また、町のほぼ中心に位置する「きずなハウス」の立地を活かし、地区や世代を超えた交流企画を開催し、移動手段の無い方には「きずな号」（※4）での送迎を行うなど、外に出るきっかけ、出会いのきっかけづくりにも努めました。

本事業を通じて、生きがいや役割づくり、孤立の防止につながるよう、今後も継続してまいります。

- ※3 昭和30年代頃まで、宮城県内各地で行われていた伝統行事で、小正月に子ども達が福の神に扮し、近隣の家々を回って福をもららし、そのお礼としてお餅やみかん、お菓子をもらったという風習。
- ※4 震災により、図書センター等の被災や仮設住宅での生活などで、子ども達が落ち着いて勉強できる場が減ってしまったため、2015年に移動学び舎バスとして制作・運用開始。これまで、移動学び舎、町のフィールドワークや釣り体験、災害公営住宅でのお茶会などに利用。現在では、七ヶ浜町民の交流にも活用されている。



福の神に扮し、一軒一軒招待状を手渡す子ども達



餃子づくりや合唱など、地元中学生が大活躍した「きずな食堂」

宮城県 NPO 等の絆力を活かした震災復興支援事業 ～地元ボランティア団体等の活動サポート～

きずなネットは、2017 年度に町内で活動するボランティア 8 団体で立ち上げ、今年度は、1 団体加わり 9 団体となりました。さらに、主にきずなハウスの庭（七ヶ浜ファームガーデン）の整備管理を担うグリーンサポーターズも加わり、小学生のメンバーも活動しています。

各団体は、おおよそ『防災・福祉・まちづくり』『ものづくり』『交流・魅力発信』などの分野に分かれています。それを活かして「七ヶ浜の復興のまちづくりにささやかながら、かかわってみたい」とか「ファームガーデンにハンモックや巣箱を作りたい」「七ヶ浜の良いところをもっと知ってほしい」など、町民の方々の想いを形にし、自主的な地域活動として取り組むきずなネットをサポートしています。

今年度は、きずなハウスを中心にした学びと活動の場作り支援事業（絆力）として、きずなネット会議を 5 回開催し、きずなネットの合同企画は、昨年度に引き続き、7 月にきずなネットまつり（きずなハウスリニューアルオープン 1 周年とタイアップ・約 200 名参加）、11 月に被災地学習・交流日帰りバスツアー（名取市～亘理町～相馬市・46 名参加）を行いました。きずなネットまつりは、実行委員会を発足し、企画運営を自分たちで行いました。準備は大変でしたが、参加者の笑顔と満足の声に充実感で満たされたようでした。新たな取り組みはメンバーからの要望で、保存食作りと伝わるチラシの作り方の研修会を実施しました。また、前述のファームガーデンの活動は、2 回の植樹とハーブティーや樹名板作りのワークショップの開催、

年間管理計画とミーティングを行いました。団体どうしでは、きずな F プロジェクトが七ヶ浜フィールドワーク、おりおり & マザーふぁーむが協働で藍の生葉染め、メンバー有志で岩沼みんなの家視察と交流に取り組みました。こうした様々な活動が、行政からも地域福祉推進事業として、良い評価を得ることができ、メンバーのモチベーションアップと自信につながりました。



被災地学習・交流日帰りバスツアー



藍の生葉染め



きずなネットまつり



きずなネット定例会議

外部支援のコーディネート

●みふねっと（御船町災害支援団体ネットワーク）

2016年4月に発生した熊本地震から2年。熊本県御船町（みふねまち）は震度6弱の地震により、5,000棟以上の住家被害がありました。ボランティアやNPO法人による緩やかなネットワーク「みふねっと」は、仮設住宅支援や復興まちづくりで支援活動を続けおり、5月18日～20日の三日間、先災地である東日本大震災で被害を受けた宮城県内各地を視察するスタディーツアーを企画し、最終日にきずなハウスを訪問され、RSYがコーディネートしました。

七ヶ浜町復興推進課による被災概要や復興状況を説明の後、「きずなネット」の参加団体や地域住民の皆さんと交流しました。また、御船町では仮設住宅から災害公営住宅へ転居が始まるということで、菖蒲田浜地区にある災害公営住宅へご案内し、隣接する地区避難所で住民の方と、実際の暮らし

ぶりやコミュニティづくりのあり方について意見交換しました。実際に住んでいる人にしかわからない課題も情報共有し、「今回聞いた話はこれからの御船町に重要なことばかりだった。とても有意義な時間を過ごせて感謝します」という言葉が寄せられました。



地区避難所での情報交換会

●安城きずなプロジェクトチーム

12月8日、9日と愛知県安城市から5名のボランティアが七ヶ浜町を訪れ、クリスマスやお正月飾りづくりのワークショップ『安城・七ヶ浜ふれあい交流サロン』を開催しました。松ヶ浜、菖蒲田浜、代ヶ崎浜の各地区避難所、そしてきずなハウスでも開催し、たくさんの参加者の皆様が簡単ながらもかわいらしい手作り品づくりを楽しみました。

安城きずなプロジェクトチームは、震災後、七ヶ浜に野菜を届ける支援から始まり、現在では交流を目的として、継続して訪れて来ています。毎年、この時期になると来訪を楽しみにされている住民の皆様もあり、これからも末永く、温かい交流が育まれるよう、サポートしていきたいと思えます。

のり募金

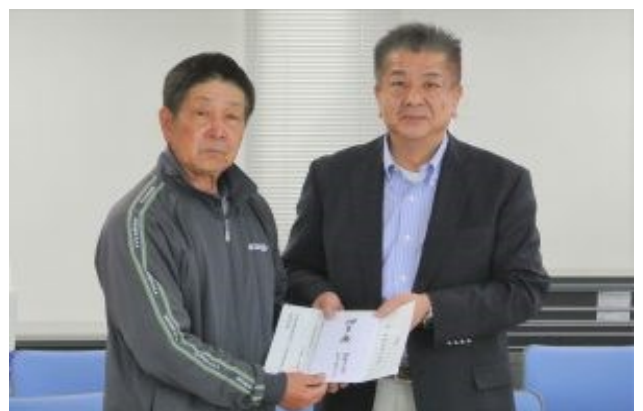
2019年1月20日に、宮城県・仙台塩釜港で貨物船から重油漏れが発生。今季の七ヶ浜ののり養殖が中止となり、総額15億円近い被害を受けました。

RSYはすぐに被災した生産者を応援するための募金活動を開始。総額418,000円もの支援金が集まり、宮城県漁業協同組合七ヶ浜支所へお届けしました。

漁協の方々からは、「震災から8年、懸命になつてのり養殖を再興し、県内でののり生産量の約3割を七ヶ浜で採れるまでになったのに、非常に悔しい」など、悲痛な想いをお話しされました。

それでも、2018年の第70回・2019年の第71回「奉献乾海苔品評会」にて優賞に選ばれた七ヶ浜産ののり養殖の再開に向け、力強い言葉もお聞

きできました。今回の皆様からのご厚志が、七ヶ浜ののり生産者の方々にとって、心の励みとなり、来期ののり生産再開へとつながることを願って、今後も引き続き応援してまいります。



代表理事の栗田が責任をもってお届けしました

東日本大震災支援全国ネットワーク（JCN）との連携

JCNは、578 団体が加入するネットワーク組織であり、被災3県の支援団体と連携しながら、被災地の状況や課題等を県内外に発信し、様々な支援団体が今でも東日本大震災に関われるきっかけづくりを行っております。また、広域避難者支援においては、避難先での支援体制の強化に力を入れて活動しています。

レスキューストックヤード（RSY）には、JCNの世話団体として、活動に対して、助言や協力をいただいています。特に2018年度は当団体が開催する「3.11の今がわかる会議」を初めて名古屋

屋で開催しましたが、事前の準備から当日の運営協力まで幅広い協力をいただきました。おかげさまで、当日は約130名の方に参加いただき、東日本大震災の現状を東海圏の支援団体に広く知ってもらうきっかけをつくることができました。また、当日は名古屋市長にも参加いただき、名古屋市が支援されている陸前高田市のお話も聞くことができました。2019年度も引き続き、連携を深めて、東日本大震災の現状や知見を広く東海圏のみなさまにも発信し、南海トラフにもつなげることができればと思います。

寄稿：JCNスタッフ杉村



各被災地の生の声に耳を傾ける参加者



熱気溢れる会場の雰囲気

東海地域の避難者支援ネットワーク

避難者の孤立を防ぎ、避難先によって受けられる支援の差を少しでもなくすため、タケダ・赤い羽根広域避難者支援プログラム助成を受け、東海圏の支援関係団体の緩やかなつながりづくりを継続しています。

今年度は、支援関係者による情報交換会開催のほか、支援状況や課題を整理するためのアンケート調査を実施しました。東海圏の行政、社協、専門家、支援関係者に加え、避難者が抱える課題は多岐にわたることから「生活困窮」「不登校」「子ども支援」などをキーワードに選出したNPOにもアンケートを依頼。避難者の存在を周知し、今後の連携先となる可能性がある団体の把握にもつながりました。3月に開催した「避難者の現状と課題を伝えるシンポジウム」では、支援に関わる医師や司法書士、子ども支援団体、コミュニティソーシャルワーカー

カーに登壇いただきました。避難者の現状をそれぞれの視点から伝えていただくことで、多様なセクターの関わりと横のつながりの大切さを実感しました。



全国的にも減少傾向にある支援団体にとって
貴重な情報交換の場に

愛知県被災者支援センター

東日本大震災および原発事故による愛知への避難者は、約 350 世帯 890 名（2019 年 3 月現在）となり、最多の 2012 年の頃と比べると約 3 分の 2 になりました。県は 2011 年 6 月からセンターを設置しており、RSYは運営団体として支援を継続しています。

センターの主な活動は、情報紙「あおぞら」の発行、定期便の送付、交流相談会の開催および協力、相談対応、個別訪問や各地域での支援体制づくりです。今年度は、相談専門員を配置し、これまでの支援で把握した個別情報をもとに、孤立や生活困窮、心や身体の病気など深刻な課題を複数抱え、継続的な支援が必要となる方（要支援者）への支援に重点をおいて活動を行いました。また、これまで要支援でなかった方が、住宅支援の終了といった支援の変化や、子どもの成長や高齢化といった家族

の変化などに影響され、暮らしが一変してしまうこともあるため、全世帯の現状を把握し、必要に応じて支援につなげていけるよう活動していきたいと考えています。



甲状腺工コー検診&交流相談会
(甲状腺学習会)の様子

FOR 子ども支援基金

東日本大震災および原発事故により、故郷や家族と離れての避難生活や、避難先が変わる度に転校するといったことは、子どもたちにも大きな負担となりました。そんな中、避難生活で悩む親の姿に気を遣うなど、様々なことを我慢している子どもの声を聴いたことから「FOR 子ども支援基金」を 2016 年に創設しました。そして、市民や企業、団体から寄せられた寄付金を原資とし、東海 3 県に避難した子どもたちを対象に、「身近な願いや将来の夢」をテーマに作文や絵を募り、夢を叶えるために必要なものを贈呈しています。

震災から 7 年が経過した第 3 回目は、17 人の願いを叶えることができました。「福島のおばあちゃんも見て星を勉強し、福島とつながりたい」と書いた小学 4 年生には望遠鏡を、「アメリカにいる友だちや、福島のろう学校の先生と顔と手を見ながら会話を楽しみたい」と書いた高校 2 年生にはパソコンを贈りました。これからも子どもたちの成長を見守り、夢を応援していきます。



大きな夢に向かって、笑顔いっぱいの贈呈式になりました！

RSYふくしま支援室

福島県から岐阜県・三重県に避難されている方々への支援を目的に、2016年度から「ふくしま支援室」を開設しています。(2019年3月末現在、約100世帯280名) 主な活動は①相談窓口の開設②戸別訪問の実施③避難先及び福島での交流相談会の開催などです。相談窓口へは、生活、住まい、健康などの質問があり、行政などに確認の後、回答をしています。

戸別訪問では12世帯のお宅を訪問し、一人ひとりのご要望や生活状況を尋ね、孤立防止と寄添った支援を目指しました。交流相談会では避難者同士の交流に留まらず、健康に対する不安やADRの申立てなどのご要望に応える形で、岐阜では甲状腺検診を、三重では原発ADR相談を同時に開催し、岐阜は6世帯22名、三重は6世帯8名の参加を頂きました。福島県郡山市での交流相談会には、愛知、岐阜、三重から14世帯26名の参加がありました。参加者には前後日を利用して福島の現在の状況を確認して頂くなど、将来的な帰還について考える機会に頂きました。



行政・専門家による個別相談



同郷同士、将来のことを安心して話せる雰囲気

東日本大震災被災者支援ボランティアセンターなごや

RSYや各区の災害ボランティアネットワークで構成する「なごや防災ボラネット」が運営協力している「東日本大震災被災者支援ボランティアセンターなごや」も設立から8年が過ぎました。市内に避難されている方の中には、最終生活拠点が決まらない方がいる一方、名古屋で暮らす中で、高齢の方の生活問題・健康問題や子どもさんの不登校問題など様々な課題が出てきました。ボランティアや社会福祉協議会が、それぞれの強みを活かした支援をしています。

「お茶っこサロン」では、愛知淑徳大学CCCとのコラボで学習支援とボーリング大会を行いました。年配者は昔を思い出し、子ども達は新しいスポーツとして楽しめる企画になりました。「革工芸の会」は、平日の昼間に行っているため参加者は少ないですが、作品ができあがってくるのが楽しみになっています。

設立時からのモットー「寄り添い、ゆっくりと、でも全力で応援します」を大切に、今後も引き続きニーズに合わせた支援を行っていきます。



外出して、人と会う機会の創出
楽しいレクリエーションがいっぱい



七ヶ浜町長 寺澤 薫さん

レスキューストックヤードの皆様には、震災直後から本町の復旧・復興に多大なご支援、ご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

東日本大震災から8年が経過し、また、復興創生期間の終了まで残り2年となり、レスキューストックヤードの皆様をはじめ、多くの皆様のご支援、ご協力により、おかげさまで本町の復興事業にもようやく終わりが見えはじめてまいりました。一昨年7月にオープンした「きずなハウス」

には、子どもからお年寄りまで多くの人が集い、町に賑わいと人と人のつながりを生み出す場として、町民の「心の復興」に大きく貢献いただいております。

今後とも皆様には、本町の復興にお力添えを賜りますようお願い申し上げますとともに、「令和」という新たな時代を迎え、町の将来を見据えたまちづくりにもご協力を賜りますようお願い申し上げます。



七ヶ浜町社会福祉協議会会長 阿部 和夫さん

レスキューストックヤードの皆さまには、8年間の長きにわたり七ヶ浜町での支援活動をして頂いております事、深く感謝を申し上げます。

活動拠点である「きずなハウス」も完成から2年が過ぎ、周りには木々が植樹され環境が整えられてきました。相変わらず老若男女が集い、笑い声が絶えない交流の場となっております。

私ども社協も防災集団移転地区や災害公営住宅にお住まいの方々の交流・見守り活動を続けており

ますが、RSYさんも「心の復興事業」に取り組み、被災地区における世代間交流事業を展開し、大変喜ばれております。

改めて温かなご支援を頂いております皆さまに御礼を申し上げ、RSYさんの益々のご清栄をご祈念いたします。



七ヶ浜町民（防災集団移転） 伊藤 政治さん

東日本大震災時には勤務中だったので、家に帰ることが出来ず、妻は国際村ホールに避難していました。翌日、帰ってから初めて惨状を確認、避難所で3ヶ月余り過ごし、様々な方々からの心温まるご支援により生活ができましたことは、感謝感謝の一言です。

その後、借上げ仮設での生活のため、支援物資の配布で列に加わる位で近所付き合いも疎遠で暮らしました。今は、集団高台移転で造成された笹

山に住民の一人として生活して3年になります。きずなハウスの皆さんには、諸行事でご支援を賜り、区民を代表し厚く御礼申し上げます。

震災から身を守る心がけとして、最低限の備え、例えば、懐中電灯やラジオ、靴や寒さ対策のカイロや常備薬などを枕元に置いておけば、避難時に役立てることが可能となります。自分の身体は自ら守ることが原則です。くれぐれも御身大切に!!



菫蒲田浜地区災害公営住宅在住 渡邊 洋子さん、渡邊 功さん

私とRSYさんとの出逢いは8年前の東日本大震災です。3月25日に浦野愛さんが「足湯をやらせて下さい」と避難所になっていた生涯学習センター（中央公民館）に来ました。その時の笑顔にとっても安心したことを覚えています。あれから沢山の事をお願いしたような気がします。避難所での仮設トイレの手すりの設置や掃除の事など数知れません。

夫は大工をしており、仲間と一緒に津波で流された家の木材を利用し、表札を作る手伝いをしました。仮設から災害公営住宅に移った今も玄関にあります。そして今、私達夫婦は、北海道むかわ町と愛媛県西予市の仮設住宅に棚付けに行き、仮設住宅での暮らし方の工夫についてお話しています。このようなチャンスを与えてくれたRSYさんに感謝しています。



きずなネット 工藤 玲子さん

RSYの皆さんには、東日本大震災の直後から七ヶ浜町に支援をいただき、私の所属しているグループも「食べさいんグループ」として、一緒に活動させていただきました。その流れで、きずなネットの一員として催し物のお手伝い等に参加しております。

また、グリーンサポーターとしても若いメンバーとともに土づくりや苗植えをし、専門の講師の下、知識を深め、楽しく活動しております。真夏

の水やり当番の時には、勝手にご褒美と称して、ミニトマトやブルーベリーを口にした時の美味しいこと！植えた樹々が元気に育ち、地域の皆さんのオアシスであり、交流の場となるようにこれからもこの活動を続けていく決意です。

子ども達の元気な声と小鳥のさえずりが聞こえる「みんなの家きずなハウス」へお立ち寄りください。ポーちゃん焼きもお待ちしております。

きずなネット（向洋中学校Fプロジェクト）

阿部 遥斗さん、岩本 美月さん、大坂 春奈さん



向洋中学校Fプロジェクト※です。これから、私たちが行った主な活動を2つ紹介します。

1つ目は、海浜清掃です。私たち向洋中学校から約160名の生徒や先生が参加しました。この海浜清掃を通して、日々の掃除を丁寧に行うこと、そしてボランティア活動に興味を持つ生徒が多くなりました。

2つ目は、きずな食堂です。きずな食堂は、松ヶ浜と菫蒲田浜の災害公営住宅等で行っていま

す。向洋中生は、きずな食堂で地域の方々との交流を図ることを目標にしています。私たちはこの2つの活動やその他の活動を通して、たくさんのことを学びました。これからも学んだことを活かして活動に取り組んでいきます。

※FプロジェクトのFは、ふるさと・復興・フューチャー（未来）の頭文字



きずなハウス利用者 引地 美華さん、陸斗くん

震災当時、私は妊娠5ヶ月で七ヶ浜にある仙台火力発電所内の職場で被災しました。津波で家も車も全て流されて、着の身着のまま携帯1つ持って避難したので、当時は支援物資がすごく助かりました。

5月末には仮設住宅に入居でき、7月末には無事に男の子を出産しました。出産後は、仮設の集会所にたくさんのボランティアさんが来てくれて、様々なイベントを開いてくれて子守りもして

くれました。入居から4年後に、仮設住宅を出て県営住宅で生活を始め、支援の手から離れました。息子も小学2年生になり、今は町営プールで水泳を習っています。

その行き帰りにきずなハウスで軽食や駄菓子を買って、また交流が始まりました。これからも生活の中で長く関わっていければいいなあと思っています。



きずなハウス利用者 鈴木 悦子さん、琴音さん、咲良さん

きずなハウスを利用して、3年くらいになります。子どもが町民プールで毎週火曜日、水泳を習っているのので、水泳が終わるときずなハウスに行って駄菓子を買うのが楽しみで利用させていただいております。なかでも「スマートボール」というゲームをするのが楽しみで、毎回やっています。

お店の方も皆さん、優しい方ばかりで話しやすく、行くと大きな声で楽しく笑って話をしてい

ます。また、いろいろなイベントを開催しているので、いつも楽しみにしています。

これからも、いろいろなイベントを開催して七ヶ浜をみんなで盛り上げていってほしいと思います。今後とも、親子共々よろしく願いいたします。



安城・七ヶ浜交流プロジェクトチーム 間瀬 トシ子さん

平成23年3月に発生した東日本大震災。4月末、RSYボラバス第4陣で初めて七ヶ浜に入りました。近所のおばあさんが、青野菜がなくて困っているそうで、わしゃが家の野菜を持って行っとくれんか?の一言を、栗田理事長に話したところ、「たべさいんグループ」につないで頂き、安城と七ヶ浜の交流が始まりました。安城のチンゲンサイで漬物を作り「たべさいん漬け」と名付け、避難所で喜ばれた事から、逆輸入して安城市

のイベント時に広め好評を得るなど、現在の「安城・七ヶ浜交流PT」の活動につながっています。初めて七ヶ浜に入って8年、七ヶ浜に野菜送る活動から、文化交流、農業者を中心とした相互交流、そしてここ2~3年は、ふれあいサロンでの交流と変化しながら、その都度RSYにご助言頂き、連絡調整など大変お世話になりました。今後も、RSYご指導の下、被災地に学び、被災地の復興を応援し、心を通わす活動を続けたいと思います。



株式会社グリーン・ワイズ サービスセンター事業部 木村 正典さん

2018年、きずなハウスにたくさんの香るみどりが植栽されました。植物の香りはほかの生き物とのコミュニケーションツール。植物はほかの生き物と繋がって生きています。植物を育てることは生き物全体すなわち自然を育てることにほかなりません。みどりが豊かになることで、人と自然との繋がりが深まるだけでなく、皆で関わることで

人と人との繋がりが生まれ、豊かな社会を作ることができます。砂漠状態からみどりあふれる庭にするために、まずは食べられる雑草（＝生きた保存食）を皆で庭に殖やしましょう。レスキューストックヤードの皆さんのお手伝いをしながら、みどりを通して皆のきずなが深まり、たくさんの笑顔が生まれることを願っています。



東北大学教授／多元物質科学研究所所長 村松 淳司さん

レスキューストックヤード（RSY）さんの、七ヶ浜町への支援は、東日本大震災前からの縁であり、震災復興の中でも「まちづくり」そのものでした。「まちづくり」は、いわば人と人のネットワークづくりでもあるので、震災でバラバラになった、人心や人々の生活を、再びネットワーク化することで、真の復興＝心の復興に直結します。

支援の形は「ボランティアきずな館」、「きずなハウス」、そして「七ヶ浜みんなの家きずなハ

ウス」と変化を遂げてきました。七ヶ浜では、旧住民－新住民、各世代間、そして、元気で明るい子どもたちが、共通ワード「絆」をベースに、年代、性別、思想信条を超えた輪で繋がりが、より大きな輪となって発展を遂げていきます。

震災で失ったものは本当に多かったけど、これからは悲しみを乗り越え、明日へと向かい、震災前にあった「絆」以上に堅い「絆」が結ばれることは間違いないでしょう。明日の七ヶ浜、宮城、東北、日本、そして未来の地球を担うのは、君たちなのだ、と、RSYは、そっと囁いています。



特定非営利活動法人せんだい・みやぎNPOセンター／ コミュニティ・ワークス代表 青木 ユカリさん

先日久しぶりに”七ヶ浜みんなの家きずなハウス”を訪ねて、この一年の取り組みについてお話しを伺いました。リニューアルしたきずなハウスには、年間10,000人を越す利用があるとのこと。東日本大震災以降、形を変えながらその場を開き、地域のみなさんと創ってこられた賜物ではないでしょうか。こどもたちの利用が堪えず、多世代が集う場となり、みんなの欠かせない存在として成長していることを実感いたしました。そして駄菓子のチカラは、いつの時代もこども心をくす

ぐる最強のパートナーであることも。これからはさらにファームガーデンの植物たちもその一助となることでしょう。

また、町内各地区での交流の様子や、災害をきっかけにつながりを得た国内外の地域の方々との様子も、『きずなハウス通信』を通じて知ることができます。こちらも日々の積み重ねが土台となっていることを実感いたします。

これからもさらに力強く根を張るよう、たまにですが水やりにお邪魔させてください。

2018年度七ヶ浜スタッフ



東日本大震災から9年目、元号が平成から令和へと変わり、復興10年と言われる国の復興・創成期間の節目まで残りわずかとなりました。現在の七ヶ浜スタッフは、きずなハウスリニューアルオープン前後にかかわったので、震災当時の様子は住民の皆さまから学ばせていただいております。ある意味、新しい関係性が構築できつつあるように感じています。今だから聞いてほしいこと、話せるようになったことなど、やっと笑って話せる気負いのない話を伺うと、この8年は必要な時間だったのかもしれないと、実感しています。

時が流れ、きずなハウスを訪れる子ども達の顔ぶれも変わりました。でも、友だちと談笑したり、駄菓子やゲームを楽しんだりする笑い声は、ずっときずなハウスに響き、私たちも元気ももらっています。きずなハウスという復興の証のひとつとして、世代・地域を越えてこれからも町民の皆さまの心の拠り所となるよう、これまで築いてきた心の交流を受け継ぎ、一人ひとり丁寧に寄り添い続けていきたいと思っております。

RSY七ヶ浜スタッフ

石木田 裕子

菅原 淳一

鈴木 彩女

最上 真実

矢内 健一

横田 順広

渡邊 陽太



「七ヶ浜 みんなの家 きずなハウス」がつむぐ人と人との絆

何事もなかったかのようにきらきらと碧く輝く海を見下ろす町を中心に「七ヶ浜 みんなの家 きずなハウス」は誕生した。この建設にあたっては、サークルKサンクス（現ファミリーマート）による東北の子どもたちに幸せな笑顔を贈る店頭募金の趣旨に賛同した無数の人々の善意と、震災で失った「場」の再生を願った日本有数の建築家や賛同した若き建築家による「みんなの家ネットワーク」、その活動に賛同し寄付をしたロレックスとの協働により実現した。さらに、それを支えた町内外の市民・ボランティア・NPO・企業等、そして七ヶ浜町の理解と協力によって成し得ることができた。

東日本大震災でどれほど多くの涙が流されたかは計り知れない。今でも涙があふれることはある。これからも涙をこらえられない時もあるだろう。しかし、その涙を明日への生きる力につむいでいこう。この場所が、ここに生きる子どもからお年寄り、そして町を訪れる人々みんなの家となり、大いに語り、大いに交わり、人と人との「きずな」の交流拠点となることを願う。

2017年7月21日。今日がこの願いの記念日である。

文：レスキューストックヤード



特別協賛

ROLEX

寄付協力

株式会社ファミリーマート

意匠設計 株式会社近藤智雄建築設計事務所

構造設計 金田充弘 櫻井克哉

設備設計 清野新

外構設計 株式会社グリーン・ワイズ

施工 株式会社シェルター

協賛 AGC硝子建材株式会社

TOTO株式会社

大光電機株式会社

オスモ&エアール株式会社

株式会社デツヤ・ジャパン

YKK AP株式会社

株式会社サンゲツ

トーソー株式会社

SHIBAURA HOUSE

伊東葉花 千世 (順不同)

企画 認定特定非営利活動法人レスキューストックヤード

特定非営利活動法人 HOME-FOR-ALL

七ヶ浜町

きずなハウス内に掲げている記念プレート

認定特定非営利活動法人 レスキューストックヤード

東日本大震災 被災者支援 2018年度 活動報告書

2019年6月30日発行

認定特定非営利活動法人レスキューストックヤード
名古屋事務所

〒461-0001 名古屋市東区泉 1-13-34 名建協 2階

tel 052-253-7550

fax 052-253-7552

e-mail info@rsy-nagoya.com

web <http://rsy-nagoya.com/>

twitter rescuestockyard

facebook rsy.nagoya

七ヶ浜みんなの家きずなハウス

〒985-0802 宮城県宮城郡七ヶ浜町吉田浜字野山 5-9

tel 090-9020-5887

facebook rsy.kizuna